

伊東市史だより

第7号

平成18年3月31日



写真2 宇佐美御石ヶ沢^{すみいし}の角石

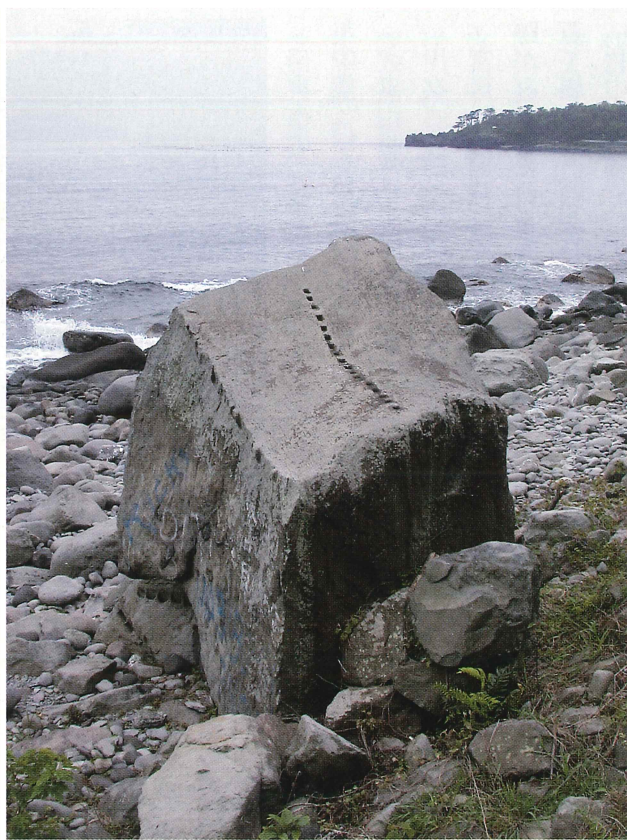


写真1 富戸海岸の「元船石」

特集 石切丁場遺跡

江戸城の石垣の大半は、伊豆半島から運ばれた石材で築かれています。伊東市内にも三百数十年前の江戸時代初期に江戸城の天下普請に動員された大名たちが競って採石作業を行った痕跡が多数残されています。

写真は、その代表的な史跡のひとつである宇佐美の「御石ヶ沢」の山中にある角石^{すみいし}と富戸海岸の石材で、どちらも四メートルに達する大きなものです。

「角石」は石垣に組まれた時に角に配置される重要な石で、四角に整形されて運び出そうとした形跡が残っています。富戸海岸の石材は地元で「元船石」と呼ばれてきた巨石で、分厚い板状に割ろうとした痕跡が残っています。作業の際にあられた穴(矢穴)が見えています。

このように伊東市内の山中や海岸からは江戸城の築城のために石材を切り出した史跡が数多く残されているのです。

特集 伊豆石丁場遺跡

伊豆石丁場遺跡の重要性

伊東市史編集委員長 坂詰秀一

江戸城の築造に用いられた石材の採石場が伊東を中心とする伊豆東海岸の地域に存在していることは、古くから知られ、その重要性について各方面から注目されてきました。

近年、小田原において江戸城石垣用の採石場が発掘され大きな話題となっています。

慶長八年（一六〇三）から修築工事が着手された江戸城は、周囲四里に堀をめぐらし、およそ百万個の石材を用いた石垣で囲まれていました。その石材は、伊豆半島から海路、江戸に運ばれ、石垣をはじめ江戸の各所の修築に使用され「江戸城の石垣は伊豆石」と言われてきました。伊豆石は伊豆半島の東海岸をはじめ、狩野川流域・北西海岸などの石切丁場（略して石丁場＝採石場）から供給されたものですが、なかでも東海岸の石丁

場が規模も大きく中心的な存在でした。伊豆東海岸石丁場群と称されている地は、多く伊東市に含まれています。東伊豆及び熱海・真鶴岬の近くまで及び、そこで採石される伊豆石は「伊豆堅石」と呼ばれている安山岩です。



写真3 江戸城の石垣

伊東市の「宇佐美北部」「宇佐美中部」「宇佐美南部」「湯川山」「大平山腹」「小川沢」「新井」「川奈」「岡・玖須美」「鎌田」「富戸」などには、石丁場の遺跡がみとめられます。これらの石丁場には「羽柴越中守石場」「竹中伊豆守」「松平宮内少石

場」などの「刻文」、一〇〇種類以上の「刻印」が確認されています。「刻文」「刻印」の検討から、西国の諸大名が競って江戸城の天下普請のための石材を加工していたことが判ります。これらの石丁場は、慶長年間から寛永一三（一六三六）年にかけて、さらにそれ以降も開発されていたことが明らかです。

これらの石丁場遺跡については、建築史の城戸 久さんの先駆的研究もありましたが、石丁場の存在を丹念に歩き、調査して、その状態を明らかにしたのは地元の森山俊英氏や鈴木 茂氏をはじめとする郷土の歴史を研究する人達でした。鈴木さんたちの努力は、その後、市の教育委員会の分布調査の基礎となりました。

現在、石丁場の遺跡は、それぞれ地表上からの観察と残されている地名（御石ヶ沢・割石・元船石など）や「石引き道」の伝承、さらに船着場の推定地点などから調査研究が行われてきました。これらに加え、鉄槌棒・

ノミなどの鉄製工具の製造修理の遺跡、作業に従事した人達の工房・住居などを明らかにすることも必要になってきます。

このように見えますと、伊東市の石丁場遺跡は、江戸城との関係においてのみでなく、日本の近世における技術・文化・経済をはじめ舟運などの実態解明にとつて、きわめて重要な史跡であると言えることが出来ます。伊東市史編集委員会としても、市史の編集事業にあたって、石丁場の究明は、大きな眼目となっています。

伊東市の誇る石丁場の史跡は、市にとつては勿論のこと、静岡県、さらに日本の近世史を考えるうえに貴重な文化財として、長く後世に伝えていくことが必要です。

伊東市を挙げて、石丁場の遺跡を学術的に調査することによってその価値が改めて認識されてくることは明らかです。

市民の皆様のご理解とご協力を願ってやみません

（坂詰）

石切丁場遺跡とは何か

伊東市内には、いたるところに石切丁場遺跡があります。これらの遺跡は、多くが江戸城を築く際に石垣用の石材を取るために開かれたもので、たいへん重要な意味のある史跡です。

豊臣秀吉による天下統一の最後の敵となった小田原の北条氏が天正十八年（一五九〇）四月から七月の籠城戦の後に滅びると、秀吉は徳川家康に対して国替えを命じます。

このため家康は、この天正十八年を境に三河の本国を捨てて、江戸に本拠を構えることになるのです。以後二百数十年の間、江戸は日本の政権の中心として栄え、十八世紀には世界有数の大都市となったと言われます。

江戸・東京には地質的に殆ど石材というものがありません。しかし、織田信長の築いた安土城の段階から城には巨大な石垣が構えられる時代となっていました。そこで徳川家康は、諸国の大名たちを動員して石のない

江戸へ大量の石材を海上輸送させる天下普請に着手したのです。

江戸に運ぶ大量の石材の産地として真鶴岬周辺から伊豆東海岸、伊豆北西海岸など広大な範囲が指定されました。そうした大量の石材を運ぶために家康は、まず、石材を輸送する石船の建造から着手させます。下命された大名たちは、船・石材・人員などを「献上」することで徳川政権への忠誠を示すように努めます。慶長十年（一六〇五）に石船の建造を命じられた浅野幸長は、三百八十五艘という膨大な数の石船を献上したと記録されています。



写真4 小倉城

このように大動員態勢をとった

大名たちの足跡

動員された大名たちは具体的にどう動いたのでしょうか。

『徳川実紀』という記録には慶長十五年（一六一〇）に名古屋城の天下普請に動員された福島正則が同僚大名たちに「江戸城、駿府城と続けざまに動員されて諸大名は疲弊している。しかし、これまでは天下の府城で

江戸城の築城は、大まかにいうと関東・東北の諸大名は堀を掘って海岸を埋め立てる作業を分担し、西国大名は石垣を築くことを中心に分担しています。戦国乱世を生き残ってきた諸大名たちは、天下を取った徳川家の居城を築くのに根こそぎ動員されたのですが、そのような建設・土木工事を「天下普請」とか「御手伝普請」と呼んでいます。天下普請で築かれた城には「大坂城」「名古屋城」などいくつかありますが、なかでも江戸城は史上最大の城郭であり、日本の歴史に与えた影響もたいへん大きいのです。

あるから苦労とも思わないが、

今度の名古屋城は、大御所様（家康）の城ではなく、庶子の居城ではないか。なぜそこまで厳しく動員されるのか。なんとかならないものか」とこぼしたそうです。これを聞いた加藤清正は「もし、不満があるのなら、他人に議するまでもない。さつさと本国に帰って戦の準備をされるが良い」と突っぱねたとあります。

猛将として知られる福島正則ですが、彼の弱音が語るように、たび重なる動員は大名たちの財力や家臣たちの行動にも深刻な影響を与えたことでしょう。しかし、天下を取った者にとつて、天下普請による築城は競争相手を手厳しく動員して疲弊させ、自らの地歩を強固にしつつ、万民にもその権威を見せつける絶好の機会だったのです。

藤堂高虎が設計者となった江戸城の築城は、大規模なものは慶長八年（一六〇三）に始まり、寛永十三年（一六三六）頃まで、数度の天下普請として続けられます。後半の寛永年間の天下普

請には松平姓を名乗る親藩大名
たちも盛んに動員されますが、

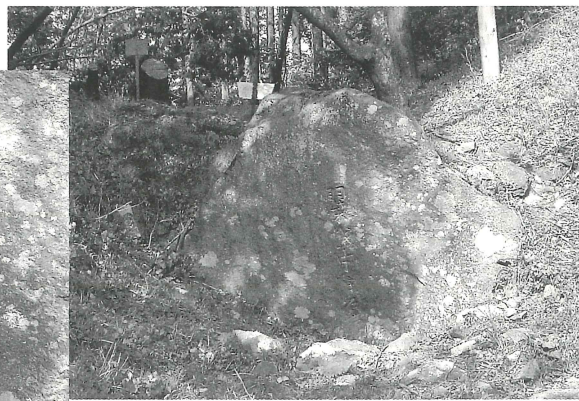


写真5 羽柴越中守石場



写真6 羽柴越中文字近接

柴越中守石場」と刻まれている。羽柴越中守とは、千利休の高弟で茶人としても有名な武将細川忠興のこと、豊臣家との関係から羽柴姓を名乗ったまま徳川家の天下普請に参加しているのです。

細川忠興は自分の領国では写真4に示したような巨大な石垣の上に天守閣（ただし、建築は戦後復元されたもの）をもつ城を築いていますが、自分の領国でこういう城を築きつつ、一方で徳川家との付き合いから江戸城、大坂城、名古屋城と次々に巨大な築城工事をこなしていたことになりました。

では、具体的に伊東市にそうした大名たちが残した足跡があるのでしょうか？

写真5の宇佐美のナコウ山の「羽柴越中守石場」という銘文も具体的にそうした大名の丁場（現場）があったことを示していますが、写真7と拓本1に示した鎌田の道路脇にある大石には「これより南 竹中伊豆守」と刻まれています。竹中伊豆守は、

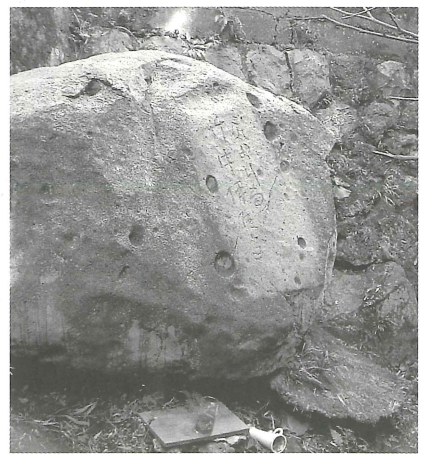


写真7 竹中伊豆守

豊臣秀吉の軍師として有名な竹中半兵衛の子孫と推定されます。

また、川奈と

新井の境の山中には拓本1に示したように「これより北みなミ

いよ松山石は」と刻まれた石が残っています。

これは、四国の松山藩主となつた松平家の石丁場の範囲を示す石です。同様に、宇佐美の御石ヶ沢には「松平宮内少石場」との



拓本1 新井川奈境の伊予松山石場銘

銘の石もあります。

こうした例から、江戸時代初期の慶長年間から寛永年間に実在した大名たちは、伊東市内など伊豆の各地に、自分の石垣普請に使う石材を切り出すための丁場を確保していたことが石に刻まれた文字史料で確かめることができるのです。これらの石は、そうした歴史を語る証拠として非常に重要です。

石に刻まれる刻印

江戸城の石垣の表面を良く観察すると井・田・口・▽などのいろいろなマークが刻まれていることに気づきます。こうしたマークは「刻印」と呼ばれていて、天下普請で造られた城の石垣には、よくみられるものです。これらの刻印の意匠にはさまざまな変化があり、伊東市内だけでも一二〇種類ほど確認されています。同じ姿の刻印が、伊東でも江戸城でも見つかりますので、伊東から運ばれた石で江戸城の石垣が築かれている証拠で

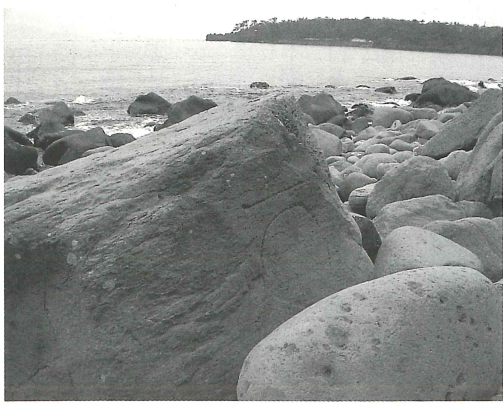
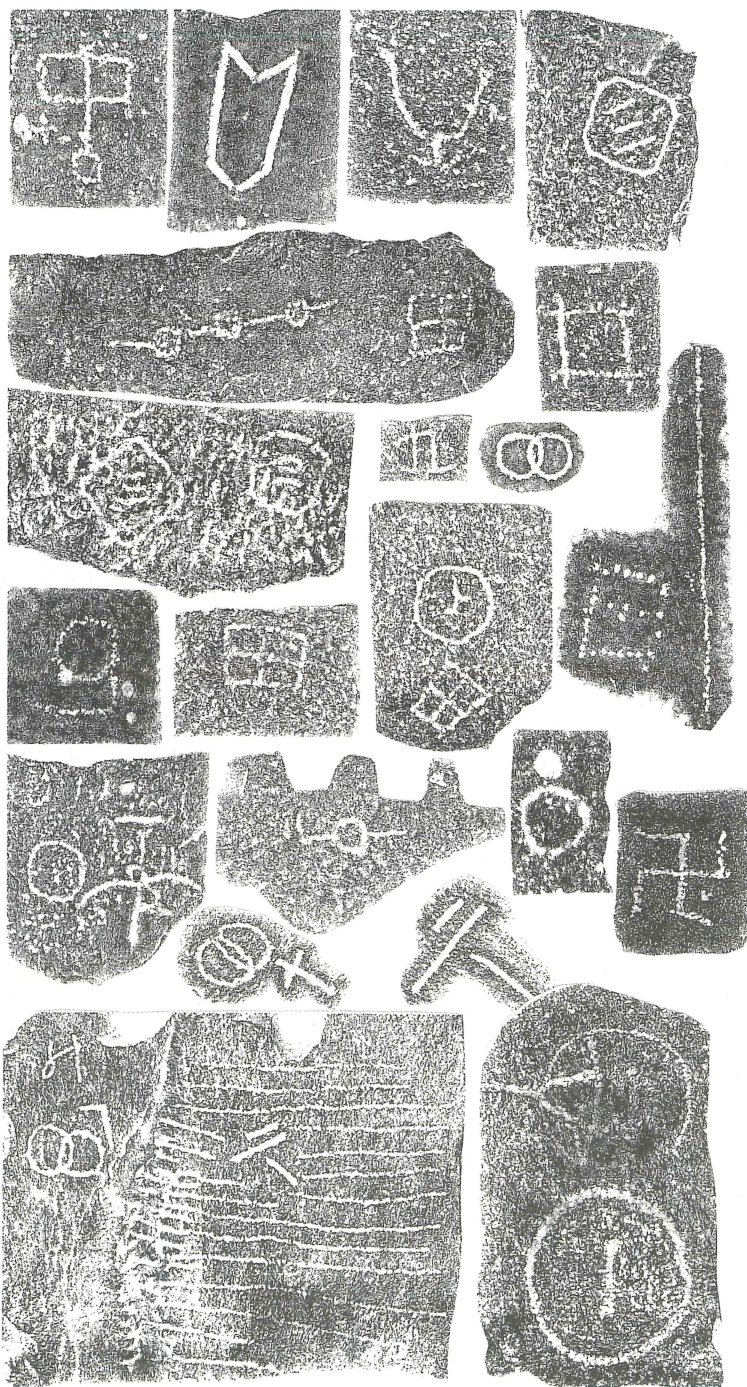


写真8 富戸の刻印石

もありですが、一方で、それぞれの刻印の形が何を意味しているかは、たいへん興味深いものです。

例えば、写真8に示した富戸



拓本2 伊東市内にある刻印のさまざま

海岸の石には数字の一と〇を組み合わせた刻印が見えています。これは、毛利家の家紋である一品を省略した形と言われています。他にも刻印に使われる意匠には巴文、菱形、卍、〇などが

とみられます。しかし、数字やひらがなの一文字など家紋とは呼べない意匠の刻印や幾つかの刻印の組み合わせが、ひとつの石やひとつの丁場内に残されている事例を考えると、単純に何

ます。このように市内には海岸にも山にも谷にも多数の刻印が刻み込まれた石が残されており、三百数十年の間、江戸城に運ばれるために準備された態勢が執られたまま残っているのです。

市民のみなさんもこの刻印の謎についていろいろと考えてみると面白い仮説が出来るかもしれません。

矢穴を残す石

不規則な形をした石を石垣の材料として適した形に割るためには「矢穴」と呼ばれる四角い



写真9 矢穴を残す石

うな姿の工具を打ち込んで石を割ります。江戸時代初期の矢穴は大変大きいのですが、江戸中期以降には急激に小さな矢になってしまいます。写真は、宇佐美の御石ヶ沢の山中に残された矢穴のあけられた石材です。

写真には二種類の大きさの矢穴が見えています。コの字形の凹部の連続が古い穴で、それと直交する方向で後世の矢穴が二箇所、開けられています。

石には「メ」と言われる方向性がありますので、それをうまく利用しながら矢穴を配置しています。この石の場合も、メの方向どおり矢穴が配置されていますが、後世に割ろうとした方向にはうまく割れなかったために江戸に運ばれずに山中に残されたものとみられます。

運ばれる石材

山中で形を整えられた石は、石引き道をたどって海岸まで運び出され、船に乗せられます。石は大変な重量がありますので、修羅と呼ばれるソリのような道具が使われたりしますが、機械のない時代ですから、人海戦術で多数の人員が搬出に関わります。こうした運搬作業には九州や四国など各地の大名領から動員された何百人もの人々が関わっていたとみられます。今、伊



写真10 石引き道

東の山中には石引が行われたとみられる道の跡も見事に残っています（写真10参照）。

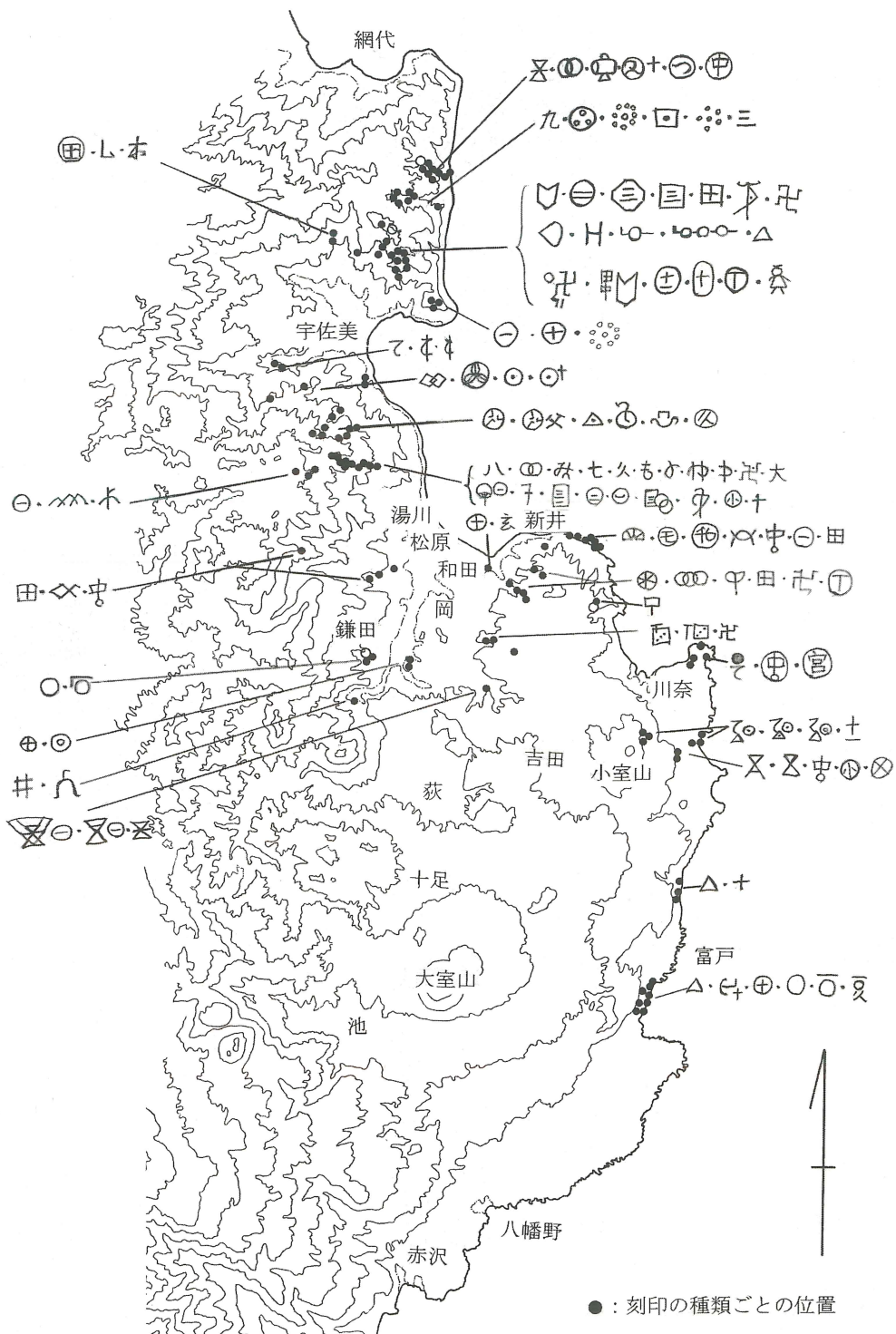
海岸に運ばれた石材は、大きさなどを検査された後、大型の船に積み込まれて江戸へ運ばれます。当時の記録には、石船は「三千余艘」に及び、石材価格は「百人持の石は銀二十枚」「ごろた石は一箱金三両」と定めたと記されています（『当代記』）。石材は重量物ですから、船の中の積み込む位置が問題だったようです。伊豆の名主たちは、石船の下積み「割木」の調達を大名たちから依頼されていることが地元の古文書で確認されます。また、三浦半島一帯には、

伊豆から運ぶ途中に石船が落した石材が今でも沿岸に点在しています。こうした石の由来を証明するかのよう、慶長十一年（一六〇六）五月には鍋島信濃守をはじめとした大名たちの石船二百艘近くが一挙に暴風のため転覆したという大事故が起きたことが記録されています。

伊東の石丁場遺跡の特徴

伊東市内の山中に残る石切り場遺跡は、「石場預」という役職者が各藩から任命されて、幕末段階まで江戸城の普請再開に即応できるように石材と石引道を管理していたことが最近の研究で判明しました。石場預は、他ならぬ私たちの先祖が拝命して二百数十年の長い期間、石丁場の維持を行って来たのです。この結果、丁場によつては現在でも数百に及ぶ石垣用の石材が山中に整然と並べられた状態で残されている場所もあります。このように古い時代の姿がそのまま残されていることが伊東の石丁場遺跡の重要な特徴です。

第1図 伊東市内でみつけた刻印石



●：刻印の種類ごとの位置

もうひとつの特徴は、史上最大の城である江戸城の石垣普請の様子を具体的に確認することができるといふ点。さらに、江戸時代という大海運時代の幕開けにふさわしく江戸との間を海運で結んだ大量輸送が行われたという特色もあります。

大坂城に石材を運んだ事で知られる瀬戸内の小豆島の石丁場遺跡群は、国指定史跡とされて往時の姿が保存されています。江戸城自体は既に昭和三十五年に特別史跡に指定されています。

伊豆の石丁場遺跡は江戸城の諸遺構とともに考え合わせるとき、日本の歴史や文化を考える上で欠くことのできない史跡と位置付けることができます。

市史編さん事業では、こうした石丁場遺跡の調査を本格的に行う予定です。市民のみなさんの積極的な協力をお願い致します。

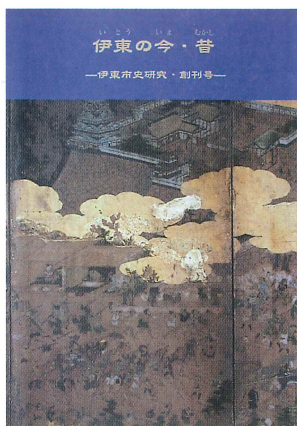
一番詳しく新しい
伊東の情報誌！

各号一〇〇〇円 市内書籍商組

合加盟書店にて

伊東の今・昔 伊東市史研究
毎号冒頭記事は簡明な講演録！

第1号 主要目次



講演録「海からみた伊東」

網野善彦

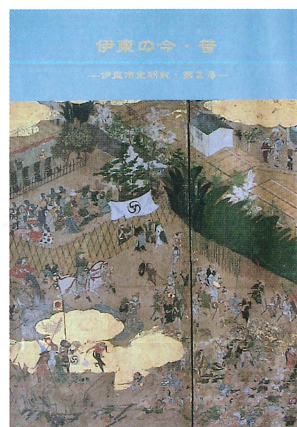
「火山がつくった伊東の大地と自然」 小山真人

「伊東氏由緒の形成」 盛本昌広

「江戸時代伊豆東海岸の交通」 加藤清志

「子供の守護神としての伊豆の道祖神」 木村 博

第2号 主要目次



講演録「伊東氏の五百年」

山田邦明

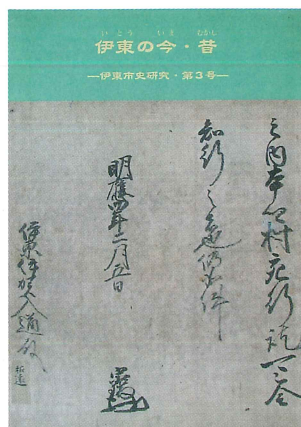
「川奈姥子洞窟の考古学的調査」 坂詰秀一他

「成長儀礼の歴史と民俗」 吉川祐子

「関東大震災に宇佐美の児童はいかに対応したか」 笹本正治

「津波歴史」データ集積の重要性」 今村文彦

第3号 主要目次



講演録「伊東の歴史と文化をどう生かすか」 笹本正治

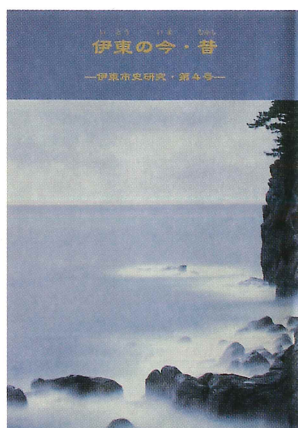
「伊東と『曾我物語』」 坂井孝一

「元禄地震被害と伊東の人々」 西山昭仁

「伊東の近代建築とその背景」 建部恭宣

「海の村を建設する」 小川徹太郎

第4号 主要目次



講演録「考古学からみた伊東の歴史」 坂詰秀一

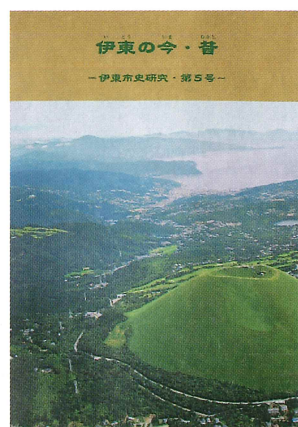
「戦国時代の伊東」 盛本昌広

「近世伊東の山林利用」 田上 繁

「近代漁業税の形成と伊東の漁業の動向」 佐々木哲也

「鎌田城発掘調査速報」 考古部会

第5号 主要目次



講演録「源頼朝一族と伊豆」 山本幸司

「明治・大正期の静岡県会の漁業税争点と増税反対運動」 佐々木哲也

「大室山をめぐる民俗」 民俗部会

最新刊

第6号 主要目次

講演録「海と職人の歴史」 神野善治

「近世伊豆における海村の展開」 泉 雅博

「沢田林、沢田についての考察」 佐藤陸郎

「三団体事件を考える」 渡辺秀夫

編集発行 伊東市教育委員会

生涯学習課 市史編さん係

〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号

☎〇五五七-三六〇-二二 内線二八四五